

第1014回サントリー定期シリーズ

4月24日(木) 19:00開演 サントリーホール

第169回東京オペラシティ定期シリーズ

4月25日(金) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

第1015回オーチャード定期演奏会

4月27日(日) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

4
/24

4
/25

4
/27

指揮：尾高忠明

ピアノ：舘野 泉*

コンサートマスター：三浦章宏

尾高惇忠：

『音の旅』(オーケストラ版)より (約10分)

第1曲「小さなコラール」

第5曲「シチリアのお姫さま」

第15曲「フィナーレ～青い鳥の住む国へ～」

ラヴェル：

左手のためのピアノ協奏曲 二長調* (約20分) 〈ラヴェル生誕150年〉

ー 休憩 (約15分) ー

エルガー：

交響曲第3番 八短調 Op. 88(A. ペイン補筆完成版) (約60分)

I. アレグロ・モルト・マエストロソ

II. スケルツォ：アレグレット

III. アダージョ・ソレンネ

IV. アレグロ

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 共催：公益財団法人 東京オペラシティ文化財団(4/25)
助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
協办：Bunkamura(4/27)



♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。
♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフのご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。
♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。
♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。
♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。終演後のカーテンコールも、マナーを守ってお楽しみください。

出演者プロフィール



©上野隆文

指揮

尾高忠明

Tadaaki Otaka, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 桂冠指揮者

1947年生まれ。国内主要オーケストラへの定期的な客演に加え、ロンドン交響楽団、BBC交響楽団、ベルリン放送響など世界各地のオーケストラに客演。1991年度サントリー音楽賞受賞。1997年には英国エリザベス女王より大英勲章CBEを授与された。その他1999年には英国エルガー協会より日本人初のエルガー・メダルを授与されたほか、1993年ウェールズ音楽演劇大学より名誉会員の称号、ウェールズ大学より名誉博士号、2012年有馬賞（NHK交響楽団）、2014年北海道文化賞、2018年度関西音楽クリティック・クラブ賞本賞、大阪文化祭賞、日本放送協会放送文化賞、2019年第49回JXTG音楽賞洋楽部門本賞等を受賞。

現在NHK交響楽団正指揮者、大阪フィルハーモニー交響楽団音楽監督、BBCウェールズ・ナショナル管弦楽団桂冠指揮者、札幌交響楽団名誉音楽監督、東京フィルハーモニー交響楽団桂冠指揮者、読売日本交響楽団名誉客演指揮者、紀尾井ホール室内管弦楽団桂冠名誉指揮者。また複数の大学で後進の指導を積極的に行っている。日本芸術院会員。

4/24

4/25

4/27



©Akira Muto

ピアノ

館野 泉

Izumi Tateno, piano

クラシック界のレジェンド、88歳ピアニスト。領域に捉われず、分野にこだわらず、常に新鮮な視点で演奏芸術の可能性を広げ、不動の地位を築いた。2002年に脳溢血で倒れ右半身不随となるも、しなやかにその運命を受けとめ、「左手のピアニスト」として活動を再開。尽きることのない情熱を、一層音楽の探求に傾け、独自のジャンルを切り開いた。2006年に「館野泉左手の文庫」を設立。“館野泉の左手”のために捧げられた作品は10ヶ国の作曲家により130曲に及ぶ。2012年以降は海外公演も再開しパリやウィーン、ベルリンにおいても委嘱作品を含むプログラムでリサイタルを行い満場の喝采で讃えられた。

2024年9月インド、ブータン、ネパールで演奏。現在、卒寿記念演奏会の全国公演を展開中。2025年は演奏生活65周年を迎える。もはや「左手」のことわりなど必要ない、身体を超える境地に至った「真の巨匠」の風格は、揺るぎない信念とひたむきな姿がもたらす、最大の魅力である。

楽曲紹介

尾高惇忠をはじめ、多くの優秀な弟子を輩出した作曲家・教育者の池内友次郎が、理想の作曲家として仰いでいたのがモーリス・ラヴェルだった。ドビュッシーとセットで「印象主義」と紹介されがちなラヴェルだが、むしろ彼の全作品を眺めてみれば、古い形式や舞曲に新たなサウンドを取り入れ、無駄のない精緻な書法で仕上げた「新古典主義」的な作風が主だったといえる。ラヴェルに私淑した池内の完璧主義は、門下たちに受け継がれていった。

ラヴェルに直接師事した作曲家のなかには英国のヴォーン・ウィリアムズがいた。彼や長くフランスに住んだディーリアスなどを除けば、イギリスの作曲家に対するフランス音楽からの影響は想像しづらいのではないだろうか？ だが実はエルガー独特の気品あるオーケストラサウンドは、19世紀フランスの作曲家に多くを負っているという。管弦楽法の名手だったベルリオーズ、フォーレの師でもあるサン＝サーンスに加え、意外かもしれないがエルガーがとりわけ称賛していたのはバレエ『 Coppélia 』で知られるドリーブだった。(小室敬幸)

尾高惇忠

『音の旅』(オーケストラ版)より

解説＝小室敬幸

指揮者・尾高忠明の兄であり、長らく東京藝術大学の教授を務めていたのが尾高惇忠(1944-2021)である。母・尾高節子はピアニストだったため幼い頃からピアノの音を聴いて育ち、「作曲よりピアノを弾くことの方が好きだった」という。東京藝術大学で池内友次郎、矢代秋雄、三善晃に学んだ後、パリ音楽院ではデュリュフレやデュティユーらに師事して和声、対位法、フーガのクラスで一等賞を得た。しかしながら個性を発揮しなければならない創作活動は停滞。前半生の代表作となった管弦楽曲『イマージュ』(1981)は、メシアン、武満徹、三善晃からの強い影響を感じさせる作品だった。

ところがピアノ・ソナタ(2004/05)あたりから師である矢代秋雄のスタンスへ接近していく。ソナタ形式やフーガといった尾高が得意としてきた伝統的な形式や書法を周囲の反発など気にせず用いたことで交響曲『時の彼方へ』(2011)等、

晩年の大作が生まれていく。そうした転機を迎える直前の2003年、カワイ音楽教室の月刊誌『あんさんぶる』のために6曲のピアノ連弾作品を作曲。翌年になってから宮沢賢治に触発されて生まれた8曲を加えたのが『音の旅』（2003/04）だ。2020年に管弦楽化された際に第11曲〈種山ヶ原〉が追加され、全15曲となった。本日演奏されるのはそのうちの3曲である。

第1曲「小さなコラル」は、惇忠が得意とする和声と対位法の技術が存分に活かされた楽曲。弦楽によるコラルのあと、その旋律を管楽器が引き継いでカノンになり、転調を繰り返しながら、最終的には最初のコラルが感動的に回帰する。

第5曲「シチリアのお姫さま」はシチリアーナや連弾組曲『ドリー』などといった（ラヴェルの師である）フォーレ作品へのオマージュを感じさせる1曲だ。シチリアとはイタリア南西に位置する地中海の島。この島に由来するとされてきた揺らぐようなリズムをもつシチリアーナ（シチリア舞曲）のスタイルで作曲されている。

第15曲「フィナーレ～青い鳥の住む国へ」は、ストラヴィンスキーのペトルーシカ和音（ハ長調と嬰ヘ長調の復調）や、メシアンの移調の限られた旋法第2番などを取り入れた現代的で刺激的なサウンドと、終曲に相応しい堂々とした旋律が対比される。

【作曲年代】2003～04年【ピアノ連弾曲】、2020年【管弦楽編曲版】 【初演（抜粋）】2022年5月15日、宮崎県立芸術劇場にて、広上淳一指揮宮崎国際音楽祭管弦楽団による

【楽器編成】フルート2（2番はピッコロ持ち替え）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2（2番はコントラファゴット持ち替え）、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、中太鼓、大太鼓、シンバル、サスペンデッドシンバル、タムタム、ウッドブロック、チューブラーベル、シロフォン、グロッケンシュピール）、ハーブ、ピアノ（チェレスタ）、弦楽5部

ラヴェル 左手のためのピアノ協奏曲

解説＝小室敬幸

50代半ばにさしかかったモーリス・ラヴェル（1875-1937）は1929年から2つのピアノ協奏曲を並行して書き進めていく。そのうち『左手のためのピアノ協奏曲』（1929～30）は、有名な哲学者の兄としても知られる、第一次世界大戦で右手を失ったピアニストのパウル・ヴィトゲンシュタインからの依頼で書かれた。もうひとつの

『ピアノ協奏曲 ト長調』(1929-31)とは敢えて異なる重厚なサウンドを志向しているのは、ピアノが左手だけであると感じさせないようにしているからだ。構成についても伝統的で古典的な『ピアノ協奏曲 ト長調』と違い、緩—急—緩というテンポの異なる3つの部分が切れ目なく続く単一楽章で、しかもソナタ形式の要素も盛り込まれている。

第1部(緩) 混沌とした[序奏]のなかから、まずはコントラファゴットが“付点リズムの主題”を、次いでホルンが“ジャズの主題”を奏で、盛り上がってゆくと2つの主題が重ね合わされる。ピアノが華々しく登場すると[提示部]になり、落ち着いたところで“付点リズムの主題”が明るい雰囲気第1主題に姿を変える。管弦楽が引き継いだあと、もう一度ピアノが戻ってくると今度は抒情的な第2主題を奏でる。管弦楽によって第1主題が再び登場すると[展開部]に。第2部へ移行するためにテンポが上がっていく。

第2部(急) 規則的なリズムにのって進んでゆくジャズ風のスケルツォ。新しいメロディに聴こえるが、実は“付点リズムの主題”と“ジャズの主題”から派生したもののなので、形式上は[展開部]が続いている。ピッコロとフルートの明るくて軽い旋律が終わると、“ジャズの主題”の上にスケルツォの旋律が乗せられて徐々に盛り上がっていく……。

第3部(緩) 第1主題の後半が管弦楽で高らかに鳴り響くと[再現部]に。続くピアノのカデンツァでは“ジャズの主題”、第2主題、第1主題の前半が再現されていく。管弦楽が第1主題を、ピアノが“ジャズの主題”を奏でるといよいよクライマックスへ。最後はスケルツォが一瞬だけ回帰する。

【作曲年代】1929-30年 【初演】1932年1月5日、ウィーンにて

【楽器編成】フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、E♭クラリネット、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、ウッドブロック)、ハープ、弦楽5部、独奏ピアノ

こむろ・たかゆき／東京音楽大学で作曲を学んだ後、同大学院では音楽学を専攻。修了後は大学の助手と非常勤講師を経て、現在は音楽ライター。クラシック音楽、現代音楽、ジャズ、映画音楽を中心に演奏会やCDの曲目解説、雑誌やWEBメディアにインタビュー記事を執筆。また、現在進行形のジャズを紹介するMOOK『Jazz The New Chapter』にも寄稿している。共著に『聴かすぎらいのための吹奏楽入門』『commons: schola〈音楽の学校〉vol.18 ピアノへの旅』。

エルガー

交響曲第3番 ハ短調 Op. 88 (A. ペイン補筆完成版)

解説＝等松春夫

20世紀初めの英国を代表する大作曲家エドワード・エルガー(1857-1934)が完成した交響曲は2曲。第1次世界大戦(1914-18)の惨禍と1920年の愛妻アリスの死を機に隠棲し、1919年のチェロ協奏曲以後は見るべき作品がないと言われてきた。しかしエルガーは、最晩年に3作目の交響曲に取り組んでいた。未完のまま1934年2月に亡くなり、約130枚の手稿が残された。

長年エルガーの研究を続けてきた英国の作曲家アンソニー・ペイン(1936-2021)は、英国放送協会(BBC)とエルガー家の協力を得て、遺稿と晩年のエルガーの発言や関係者の証言を手掛かりに交響曲を演奏可能な形に仕上げた。(その経緯については「4月定期の聴きどころ」を参照:<https://www.tpo.or.jp/information/detail-20250214-01.php>)。

第1楽章 アレグロ・モルト・マエストーソ ソナタ形式。重々しく厳粛な第1主題には、『使徒たち』『神の国』(1903、1906)に続く「使徒三部作」の完結篇になるはずだった未完のオラトリオ『最後の審判』のための素材が用いられている。慰めに満ちた抒情的な第2主題には、作曲家の最後のミューズとなった女性、ヴェラ・ホックマンへの想いが刻まれている。

第2楽章 スケルツォ:アレグレット 劇音楽『アーサー王』(1923)中の舞踏会の情景に基づく、優美でどこか悲しげな間奏曲。

第3楽章 アダージョ・ソレンネ 諦念と絶望、希望と懷疑が交錯する彼岸的な緩徐楽章。「巨大な青銅の扉を開くと不可思議なものが見える」というエルガーの残した言葉のイメージから作られた。静謐なヴィオラのソロで終わる。

第4楽章 アレグロ 前楽章の暗さを払拭するような、金管楽器群による決然としたファンファーレで開始される。めまぐるしく動き回る弦楽器群に続いて雄渾な主題と、『アーサー王』の中の騎士道的な戦いの音楽が展開される。組曲『子供部屋』(1931)中の一曲「荷馬車は通り過ぎる」をヒントにした音楽は漸減していき、タムタムの弱音で全曲は締めくくられる。

4/24

4/25

4/27

〔作曲年代〕 1932～33年(未完。ペインによる補筆は主として1993～1997年)

〔初演〕 〈部分初演〉1995年3月(放送用録音)マンチェスターBBC新放送局スタジオにて、ヤン・パスカル・トルトゥリエ指揮BBCフィルハーモニックによる。〈全曲初演〉1998年2月15日ロンドン、ロイヤル・フェスティヴァル・ホールにて、アンドルー・デイヴィス指揮BBC交響楽団による

〔楽器編成〕 フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バス・クラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(タンブリン、小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム)、ハープ2、弦楽5部

とうまつ・はるお／1962年米国パサデナ市生。防衛大学校国際関係学科教授。専攻は政治外交史・比較戦争史。オックスフォード大学博士(政治学・国際関係論)。主な著訳書に『日本帝国と委任統治』『なぜ国々は戦争をするのか』『A Gathering Darkness: The Coming of the War to the Far East and the Pacific, 1921-1942』など。1991～97年の留学中に英国音楽の魅力に目覚める。エルガー『エニグマ変奏曲』、『南国にて』、『弦楽セレナード』、ホルスト『惑星』、『セントポール組曲』等のスコア解説を執筆。英国エルガー協会、ホルスト協会会員。